

附属幼稚園の教育(9)

指導計画について

村石 京

幼稚園の参観に見えられた先生方からよく質問されることに、「自由保育を行っている場合、指導計画や日案はどのようにしているのでしょうか」ということがあります。この項では、附属幼稚園の教育はその中心が子どもの生活であり、教師は子どもが主体的に生活出来るように環境設定を行い、子どもの生活を支えていくという日常の中にあつて、教育課程や指導計画はどのような位置づけを持っているかについて、少し考えていきたいと思います。幼稚

園の教育目的は「幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」と学校教育法に定められています。ですから、子どもたちをよりよく伸ばし、教育する場として、夫々の園にはその園としての教育の理念があり、これが柱となつて、夫々の年齢やその時期にふさわしい教育課程を持ち、指導計画を組み立てています。附属幼稚園においても、平成二年度には新教育要領の内容をふまえた教育課程を作成しました。これは園で日頃実践し



している保育を系統だてて考え、より深めていくことを目的としたものであり、三歳・四歳・五歳の各年齢毎に一学期・二学期・三学期として構成したものです（教育課程については平成二年十月号に記載してあります）。そしてこの教育課程は、附属幼稚園の教育の基本となり、土台となる考えを現したものであり、指導の方針を表したものです。

そしてこの教育課程に沿った保育を行いながら、実際の子どもの姿はどのようなようであり、どのように遊び、どのような活動が行われているか、教師はどのようににかかわっているかといった実践の保育の記録をとり、まとめていくという研究を引き続き行ってきました。一年次は子どもの遊びに視点をあて、各組の幼児全員が一日の中で行っている遊びについての記録をとりました。それによって私どもは、予想していた以上に子どもたちの遊びをつくっていく力の大きさを知り、その種類の多さを知り、子どもたちが日々の生活の中で自分から遊びを見つけたたり、

考えたりしていることを知りました。そして二年次の現在は、環境とのかかわりに視点をあてながら、子どもたちがどのように幼稚園の環境にかかわりながら遊びを進めていくかについての記録をとる作業を進めている段階です。

このような保育の記録をおこす原点となっているのは、教育課程を軸としての幼児教育についての教職員の共通理解とその実践によるものなのですが、これを実際に普段の保育の中で進めていくには、やはり指導計画というものが必要となってきました。担任として級の子どもの中に教育課程をおろしていくには、綿密な指導計画を持たなければなりません。子どもを主体とした保育の中では教育課程や指導計画は要らないといった極端な論もあります。私は幼児教育を行っていく上で、教育課程や指導計画は必要であったり、軽視されるようなものではないと思います。むしろ一人ひとりの子どもも大切に思い、充分にその子どもに沿いながら伸ばし

ていきたいと考えるなら、しっかりとした幼児理解と保育理念を持ち、きちんとした指導計画を組み立てていかなければならないと思います。大切な毎日の保育を、思いつきや場あたりのなもので行うことがあってはならないと考えております。

一人ひとりの保育者が保育を行うにあたっては、その基本となるものを充分押さえ、綿密な教育計画を持った上で臨むことが大切です。その上で、実際の子どもを見ていきながら、何かそこに差を感じたり、あるいは子どもの考えたことに意義を見つけた場合（これが最も多いのですが）は、教師の予定や計画を先行するのではなく、子どもに合わせながら保育を進めていくようにしたいものです。基本的なものを充分組みたてた上で子どもに合わせ、子どもの思いを充たし、子どもを中心とした保育をする、これは保育をする者としてのゆとりと、臨機応変の対応といえるものだと思います。日常の保育の中で、子どもと教師の比重を見れば子どもの方がずっ

と重いのですが、それだからといって教師は何も持たずに保育に臨むとか、ただ子どもの好きにまかせるといった無謀なことをしたり、子どもに流されたりする日常であってはしっかりとした保育やよい指導は成り立たないと思います。子どもをよく見、よく知って子どもに合わせていくことが最も大切でありながら、その源には教師としての充分な子どもに対する理解と愛情を持ち、そして現場における教育方針や教育計画などを持っていることが肝要となると思います。

次に附属幼稚園についての指導計画などは、実際にどのように進められているかについて少しふれてみたいと思います。日常的には担任に指導案の提出を求めたりはせずに、夫々の担任は自分の思うように学級の運営を計画し、自分の考えに沿って保育を行っております。しかし保育についての基本方針や共通理解が持てるように、遊びの進め方や子どもたちについての話し合いは、出来るだけ多く行うよう

にしています。それからその年度の教育計画としては、年間の予定、学期毎の予定、月の予定などは詳しく打ち合わせ、検討するようにしています。また年間の研究計画や進め方なども、全体で討議するようになっています。更に週の予定、流れ、実践計画、留意事項等に関しては、同年齢の組毎に事前に細かく打ち合わせをしたり、それが園全体へかかわりのある内容であれば、職員全員で相談し、検討していくようにしています。

一日の保育の流れ、予想される遊び、その日の予定等は保育者が級の子どもの状況を見ながら組み立てるようにしています。実際にその日何を行うかは、組の中で子どもと教師が一体となつてつくり出していくわけですが、保育者としては何を教育目標とし、ねらいとして保育を進めていくかは充分考えていかなければなりません。附属幼稚園では毎年前期と後期の二期にわたって教育実習が行われますが、一日の保育の流れや、何に留意していくか等を

理解する上で、保育案（日案）の作成指導が、指導教官として実習生に対する指導の一つにもなっています。日々の保育の中で何を目的とし、何に配慮すべきかを細かく考えていかなければ、よい保育は成り立っていかないことは今更いうまでもないでしょう。

保育者は子どもをよく見、子どもの求めていることを知り、適切な子どものかかわりを持つことが大切であり、子どもの思いが実現出来るように援助したり、支えていくこと、これが子どもに合わせた指導というのだと思います。こうした指導を進めていく上にも、土台となる指導計画を充分にもちながら、その状況によって適宜変化させていくような保育者としての柔軟な姿勢があつてこそ、子どもを大切にしたいよりよい保育が行われていくといえるのだと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）